

複線径路・等至性モデル

—— 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して

サトウタツヤ 立命館大学文学部 Tatsuya Sato Faculty of Letters, Ritsumeikan University

安田裕子 京都大学大学院教育学研究科 Yuko Yasuda Graduate School of Education, Kyoto University

木戸彩恵 立命館大学大学院文学研究科 Ayae Kido Faculty of Letters, Ritsumeikan University

高田沙織 立命館大学大学院法務研究科 (非会員) Saori Takada School of Law, Ritsumeikan University

ヤーン・ヴァルシナー クラーク大学心理学科 (アメリカ) (非会員) Jaan Valsiner Clark University

要約

質的心理学や文化心理学の新しい出発にあたっては新しい方法論が必要である。こうした方法論は現象の性質に即していることが必要である。複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM) は、人間の成長について、その時間的変化を文化との関係で展望する新しい試みを目指したものであり、ヴァルシナーの理論的アイディアのもと我々が共同で開発してきたものである。心理学を含む広い意味での人間科学は、その扱う対象が拡大し、また、定量的、介入的方法が難しい現象を対象とする研究も増えてきた。こうした研究には定性的データの収集や分析が重要となる。複線径路・等至性モデルはそのための一つの提案である。本論文はベルタランフィのシステム論、ベルグソンの持続時間などの哲学的背景の説明を行い、複線径路、等至点 (及び両極化した等至点)、分岐点、必須通過点、非可逆的時間など、この方法の根幹をなす概念について説明を行い、実際の研究を例示しながら新しい方法論の解説を行うものである。心理学的研究は個体内に心理学的概念 (知能や性格など) が存在するものとして測定して研究をするべきではなく、TEM はそうした従来のな方法に対する代替法でもある。

キーワード

複線径路・等至性モデル, 質的心理学, 等至点, 複線径路, システム論

Title

The Discovery of Trajectory Equifinality Model.

Abstract

Qualitative psychology and cultural psychology are new beginnings for the discipline of psychology. These new beginnings also require a new methodology to fit the open systemic nature of phenomena. The trajectory equifinality model (TEM) is a new methodology for depicting the diversity of the course of human life. The concept of equifinality originated in the general system model of von Bertalanffy, and it means that the same final state may be reached from different initial conditions and in different ways. It is a general property of open systems. In the minimal case, the dynamics of the open systems entail the notion of individual trajectories that may diverge (at bifurcation points) or converge (at equifinality points). Therefore, the TEM maps the individual histories of particular systems onto the wider general system of possible trajectories that arrive at the equifinality point. After reviewing the historical and philosophical background of the TEM, important concepts such as the equifinality point (EFP), trajectory, bifurcation point, irreversible time, polarized EFP, and obligatory passage point (OPP) are explained. Then, three studies applying this methodology are presented so that new researchers can understand and practice this new methodology. Finally, the implications and limitations of the TEM are discussed. It is noted that all psychological research necessarily needs to analyze processes of psychological kind (rather than time-free essences that psychologists posit to "exist", like "intelligence", "personality" etc.), and TEM is a first step towards providing a workable alternative to existing statistical orthodoxy.

Key words

Trajectory equifinality model (TEM), qualitative psychology, equifinality point (EFP), trajectory, system theory

1 はじめに

複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model ; 以下, TEM と略すことがある) 及び歴史的構造化サンプリング (Historically Structured Sampling ; 以下, HSS と略すことがある) とは, 人間の成長について, その時間的変化を社会・文化・歴史との関係で展望する新しい試みであり, 両者は不可分のものとして, 質的心理学及び文化心理学の一部を構成する。歴史的構造化サンプリング (HSS) は研究対象の抽出 (=サンプリング) に関するデータ収集の基礎的考え方を含む方法論であり, 複線径路・等至性モデル (TEM) はデータの分析及び記述に関する方法論である¹⁾。

具体的な内容に入る前に, 耳慣れない新しい語について解説しておく。等至性は Equifinality の訳として我々が造語を行い, その初出は安田 (2005) である。開放システム (Open System) が異なる径路をたどりながらも類似 (similar) の結果にたどりつくということを示すのが等至性である。また, たどりつく結果を等至点 (Equifinality Point) と呼ぶ。複線径路は Trajectory の訳である。なお開放システムとは, それをとりまく外界・環境との交換関係抜きには存立しえないシステムのことであり, ヴァルシナー (Valsiner, 2001) はあらゆる生命体は開放システムであると指摘している。

近年, 心理学における人間理解のあり方が個体主義パラダイムの枠内にとどまっているにすぎないこと, 認知, 情動, 動機といった心的機能を個体に内在すると措定して理論構成を行っていることが批判的に指摘されており (箕浦, 1997), むしろ心的機能の作動に与える社会的文化的文脈の影響を重視すべきだという主張が理解され始めている (箕浦, 1997 ; D'Andrade, 1995)。心理学において個体主義的パラダイムの枠内にとどまる人間理解は唯一絶対のものではなく, 理解の一方法にすぎない (Bruner, 1986)。さらに歴史を緋けば, 心理学の対象とする現象が人間の精神や行為のごく一部を切り取ったものにすぎないという批判は近代心理学の成立とほぼ同時に生まれたとさえ言える。

では, 個体主義的アプローチによらない研究ではどのような展開が可能だろうか。まず, 自己や個人をその関係性から捉えようとする関係論の見方がある。関係論とは個人を前提とするのではなく関係を前提とする立場の総称である。心理療法の実践においては, 「種々の心理的障害は対人関係の障害であり, それは治療者との現実の対人関係を通して癒される」という関係論的視点が 1930 年代という早い時期に成立していたが (近藤, 1994), 近年ではこうした考えが社会心理学, 教育心理学, 発達心理学などにおいても取り入れられるようになってきた。たとえば大久保・黒沢 (2003) は動機づけ概念の関係論的検討を通して, 動機を「個人と環境のやりとり, すなわち個人と環境との絶えざる関係において立ち現れるものである」と定義しなおす試みを行っている。さらに, こうした関係論的志向は, ナラティブ研究の思想と方法論や社会文化的アプローチとも相互に影響しあっている²⁾。なお, 社会文化的アプローチでは, 比較文化研究のように, 社会や文化を独立変数として人間心理の変動を明らかにするようなスタンスをとらないことも強調しておく。

個体主義的アプローチを超えようとする研究においては, その方法として質的方法を標榜することが多い。個体主義的でない理解は量的測定にはなじみにくいからである。なぜなら, こうした非個体主義的な様々な立場では, 人間のあり方を社会文脈との関係で捉える必要が認められているという理由による。そして文脈や関係は対象を限定して量的に測定することが難しい。測定の定義は多々ありえるが「一定の手続に従って数値を割り振ること」が基本的考えの一つであろう。これは操作主義の影響をうけており, 一定の手続という表現で含意することは, 基準となるモノサシを用意しておくことであることが多い。心理学的測定とは, 心理学的な構成概念を計量して, 数値に変換することを目的としている (渡邊, 1996)。心理学的測定においては, 測定対象が実在しないため, 構成概念をたて操作的定義によって測定を行うことになる。測定は対象を数字で表すことを含んでいるため, 数字の大小という一次元性で対象を表現できると仮定することになる。その結果として意味や文脈の多様性は失われることになるのである。渡邊 (1996) は心理学的測定がそもそもそ

も状況要因を誤差として扱いやすいことを論じており、このことは量的研究が結果的に人間の多様性を無視しやすいことを意味している（心理学的測定については渡邊（1996, 1997）を参照のこと）。遠藤（2005）は発達心理学の新しい動向を展望するなかで、発達経路の多様性・複数性を見極める重要性を指摘しているのだが、従来の研究方法による実験や測定では多様性は誤差や平均を中心とした偏差と扱われるため、経路の多様性そのものを扱うのは難しい。したがって、個体主義から脱し、意味や文脈の多様性を担保するのであれば必然的に質的な方法論が重要となる。実際、質的研究法の重要性はますます認識されつつあり、様々な方法論が開発されているのである。無藤ら（2004）による『ワードマップ質的心理学』をみると、データの取り方やまとめ方、さらには論文の書き方などに関して多種多様な方法が整備されていることがわかる。

人間の発達現象の理解が個体主義的アプローチを脱し、社会文化的な背景を重視し、生涯発達を視野に入れ、個人の多様性を理解する方向にシフトしつつあるのは確かである。しかし、このような多様性を実際の発達研究や理論が取り扱う方法はこれまでに十全に整備されてきたとは言えない。認知的能力にせよ、社会性にせよ、発達段階の理論がそれらを扱う時には多くの人に共通する時間的遷移の部分に着目していた。実証的な研究では性や年齢・学年などを前提として平均値などの縮約値をもちいた抽象的記述やカテゴリ間比較をすることが多かった。そして、いくつかの異時点間の縮約値という点をつなぎ合わせた線を特性や能力の標準的な発達ラインとして措置しそのメカニズムを推察してきたのである（遠藤，2005）。このような理論や方法論は、必然的に多様性の捨象を意味せざるをえない。

本稿では、人間をシステム（特に開放システム）と捉え、その特徴である等至性を研究対象として中心的に扱うことにより、行為³⁾の遂行や選択ならびにその結果として起きる発達の現象について、その時間的経緯や社会的文化的背景の多様性を記述するための方法論を検討していく。以下では TEM（複線径路・等至性モデル）及び HSS（歴史的構造化サンプリング）について簡単にその生成過程をたどった後で理論的基礎を解説し、さらに具体的な研究を紹介する。この方

法論は直近の数年間で開発された比較的新しいアイデア群からなり、いくつかの質的な実証研究を生み出してきた。なお以下ではこうしたアイデア（概念・理論）の発展過程自体も可視化し、方法論形成という科学社会学的関心の議論に有用な素材も提供したい。

2 TEMとHSSの展開

まず簡単に TEM 及び HSS の展開についてまとめておく（表 1）。これは全体の流れの説明であり、個々の用語や概念については後に具体的に説明する。TEM と HSS にとっての前史として、ベルタランフィの一般システム理論（1968/1973）がある。彼の理論は科学の広範な分野にシステムという見方を提唱した古典的理論であり、現在では後続の多くのシステム論が提唱されているとはいえ、その価値は未だに高い。そこでは開放システムとしての人間が等至性をもつことについて、主に生物学レベルで論じられていた。彼の著書には「心理学と精神医学におけるシステム理論」という章が用意されていたが、具体的な事象に対する具体的な研究方法が展開しているというよりは、心理学などへの適用可能性について論じられていただけであった。

第一期は、文化心理学における発達の扱いの中で等至性概念と複線径路概念の意義が説かれた時期である。

これらを心理学の中に取り込んだのはヴァルシナー（2000）であった。TEM に関する最初の説明はヴァルシナー（2000）の著書『文化と人間の発達（Culture and human development）』において現れた（図 1）。この図は発達の多線性（Multi-linearity）を説明する文脈で使用されたものであり、開放システムにおいては初期状態 X から新しい状態 Y に至る道筋が複数存在することを示している。

ヴァルシナーは文化心理学の第一人者の一人であると同時に、歴史性を重視し心理学史研究も行っている。文化心理学における時間の問題を考えている彼は、時間を演算可能であるように扱わないことを示す非可逆的時間という概念を取り入れた。この他、分岐点（Bifurcation Point）という概念にも言及されていたが、

表1 TEMとHSSの経緯

前史	システム理論の提唱 (1973 頃)	システム理論の中の等至性概念
1 期	理論としての TEM (2000 頃)	発達の複線性, 等至性概念の重要視の指摘
2 期	説明枠組みとしての TEM (2004 頃)	お小遣いの貰い始め現象への適用 不妊経験の研究への適用
3 期	質的研究方法としての TEM (2005 頃)	化粧開始の研究, 中絶経験の研究への適用サンプリング 方法としての HSS の提唱



図1 複線径路モデルの初出 (Valsiner, 2000, p.14)

いずれにせよ具体的に研究を行うためのアイデアについてはほとんど触れられていなかった。その後、ヴァルシナー (2001) においては、人間のライフコースに適用する可能性が指摘され、現在の TEM に近い形でモデル化が行われた (図 2)。等至性があるということ、それぞれの人生は部分的に重なり合いながらも多様な径路をとりうること、全ての人々が全ての径路を経験できるわけではなく、経験しえなかった径路を示すことができること、などが指摘されている。

この図では、F、G、I が等至点として設定されており、B~E 及び H が分岐点である。A という出発点からいくつかの分岐点を経て F、G、I に至る多様な道筋が模式的に描かれている。A、B、C、F、G へと至る道がこのモデルでは実際に個人がたどった径路であり、他の径路は、多様性が存在すること (すなわち他の可能性があること) を示したものであった。こうした模式化は現象の説明への有効性を示していたが、実際の現象には適用されていなかった。また、この時点において、等至点と分岐点の概念は未分化であった。

第二期は、TEM が実証研究に適用され始めた時期であり、研究者が関心をもつ現象を扱う際に、等至性

概念と複線径路概念を取り入れることで、新しい方法論が生まれることを確認した時期である。

この第二期において、実際の文化心理学的事象の説明にこの図式を用いてみたのはサトウ (Sato, 2004) である。彼は日本にヴァルシナーを迎えて行われた文化心理学シンポジウムにおいて、韓国の子どものお小遣い開始についての現象を説明する時に TEM の図式を用いた。この研究は山本ら (2003) による共同研究の一部として韓国の母子にインタビュー調査を行った際の結果を示したものである (この共同研究全体については、山本ら (2003) 及び竹尾ら (2004) などを参照されたい)。

サトウ (Sato, 2004) が韓国のある子どもにインタビューを行ったところ、定期的な定額のお小遣いをもらうまでの過程は若干複雑であった。以下、簡単なケースレポートのように引用して紹介する。

インタビュー対象者は x 年生の女子児童である。この学年が始まった時 (韓国は 3 月 1 日) に親子で合意して定期定額のお小遣いを開始していた。しかし、子どもが管理を放棄してしまい、また、実際に金銭を使うこともほとんどなかった。

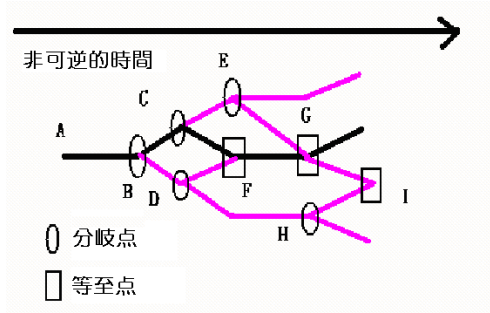


図2 TEMの原形 (Valsiner, 2001, p.62 を訳したもの)

机の上にお小遣いを放置するようなことが続いたため、見かねた親は「そんなことならお小遣いをやめる」と宣言した。すると、子どもの側も定期定額お小遣いに執着することなく「自分で管理するくらいならいい」と応じたのであった。それ以前、子どもは必要に応じて少額をもらって買い物をするという形だったのであるが、また、その形式に復帰することを親子ともども合意したということである。しかし、周りの友だちがお小遣いをもらうようになると、子どもは自分も再び定期定額お小遣いが必要だと申し入れをした。親もそれに応じた。調査時期現在、 $x+1$ 年の開始時期から再開することで親子が合意している (Sato, 2004)。

以上のような経緯は図3のように描くことができる。実際サトウ (Sato, 2004) は最初のようにプロセスを描いた。このような数直線的な描き方は、親子それぞれの立場を明確にし、それぞれの出来事の時間的順序を表してはいる。

しかしサトウ (Sato, 2004) は先の図2を取り入れてプロセスを描く方が適切ではないかと考えた (図4)。

この図で、分岐点Cがお小遣いの開始である。しかしこの子どもはその状態から前の状態(定期定額)へと戻ることになった。ここで大事なはその間も時間が進行していることである。元に戻った、のではなく、時間が進行するなかで元の状態を選んだのである(これを退行と概念化することもできるだろうが、それは元の状態に戻ったことを重視するような考え方で

ある。ここでは時間が進行していることの方を重視する)。調査時期において当該児童はFとGの間におり、Gの時点で再び定期定額お小遣いが開始される予定だった。ここで、実際にたどった道は太線(黒線)で示されている。本稿では一事例のみしか提示しないが、たとえば複数のデータを得たときには、Eをアルバイトの開始などとして設定することが可能となるかもしれない。Cで定期定額お小遣いを開始した子どもは、さらにお小遣いを増やすために、自分で稼ぐようになるかもしれない。図4のような図式を用いるなら、複数の選択肢や径路が存在する中の一つとして、定期定額お小遣いの自発的取りやめや再開要望を位置づけることが可能だということが展望できた。

このシンポジウムを通じてヴァルシナーは自身の概念の有効性に改めて気づき——そこにある本への執筆依頼が舞い込み——共著の形で方法論を確立するための論文の執筆が開始された (Valsiner & Sato, in press)。さらに安田 (2005) や木戸・サトウ (2004) の研究が開始され、必須通過点 (Obligatory Passage Point; OPP) という概念が生まれた。必須通過点という概念を取り入れることで、本来大きな自由をもちうるはずの人間の経験がある一定の結節点に収束しているという状態を描くことが可能となった。生物体としての人間の制約条件や社会制度によって提供されている制約条件を記述しやすくなったのである (Sato, Yasuda & Kido, 2004)。

第三期は、より積極的に方法論としての有効性を確立させるために、先の共著論文 (Valsiner & Sato, in press) 執筆過程において、データ収集法としての

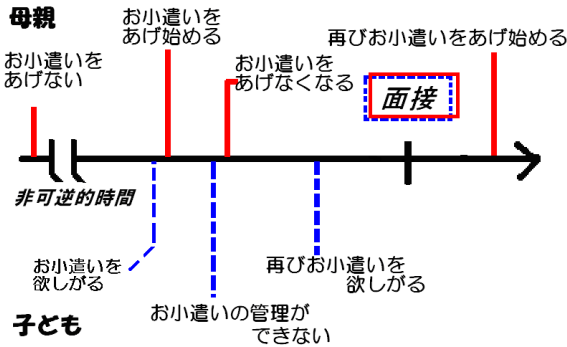


図3 お小遣い開始に関する数直線の表現

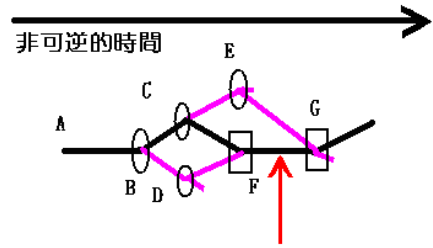


図4 お小遣い開始に関するTEM

HSS が明確に概念化され、サンプリング手法の一つとして位置づけられるに至った時期である。人間を開放システムとして捉えることの重要性をふまえたうえで、ランダムサンプリングが人間研究にそぐわないことが示唆された。その上でデータ収集はどうあるべきなのか、得られたデータをどのように TEM に結びつけていくのか、という方法論が模索された。

さらに、インタビュー調査におけるデータ分析に TEM を結びつけるために KJ 法の援用が試みられた。具体的には、女性の人工妊娠中絶選択の研究に取り組む者が現れた(高田, 2004)。高田の研究は他の研究とは異なり、データ収集時から TEM を意識した初めての研究であり、データ分析における KJ 法的な手法と TEM 的な手法との融合が目指された。

3 TEMに必要ないくつかの概念とその説明

では、実際に TEM ではどのような概念ツールを用いて現象の記述を行うのだろうか。以下では、概念の説明を先に行うが、これらの概念は後に紹介する具体的な研究の展開と共に生成されてきたことに留意してほしい。いくつかの重要な概念については研究が開始される前から整備されていたが、実証研究を行うなかで他のいくつかの概念が生まれてきたのである。

1 開放システム (Open System) としての人間と定常状態

一般システム理論の提唱者、ベルタランフィ自身、明確な文章の形ではシステムの定義を与えていないが⁴⁾、彼にとってシステムとは「相互に作用し合う要素の集合」であり、それらの要素はたとえ複雑であっても何らかの形でオーガナイズ(系統化・編成)されている、ということの意味していると思われる。システムとは、要素群とその関係からなり、それらが結びつきあう機能が全体の性質を創造するものである(Valsiner, 2000)。

初期のシステム論によれば、システムには開放システムと閉鎖システムがある。後者(閉鎖システム)は環境から孤立し環境と相互交渉をしないシステムであり、熱力学などが扱うシステムはこうしたものである。一方、システムがその置かれた特殊な環境と交換を行うのが開放システムの特徴であり、全ての生物学的、心理学的、社会的システムは本質的に開放システムである。ベルタランフィ(1968/1973)は「生物体は成分の流入と流出、生成と分解のなかで自己を維持しており、生きている限りけっして化学的、熱力学的平衡の状態になく、それとは違ういわゆる定常状態にある」としている。人間も開放システムとして考えるべきであり、日常的には、外界と交渉しながらも定常状態が保たれていると考えるべきであろう。人間を開放システム(の心理学的システム)として見た場合、そ

の外界との交換関係は、記号を媒介としたコミュニケーションによってなされる (Valsiner, 2000)。

なお、ベルタランフィ自身は指摘していない点であるが、心理学にとって重要なのは、人間を開放システムであると考えた際のサンプリング法の問題である。心理学で伝統的に好まれているランダムサンプリングのような手法は、人間を閉鎖システムとして見なければ成立しにくい。定常状態としての人間が開放システムとして外界と不断のやりとりを行っているとするれば、袋の中からサイコロを取り出すようなサンプリング方法は妥当ではない、ということである。この問題については本論文第4節で扱う。

2 等至性と等至点

(Equifinality Point=EFP)

開放システムには二つの重大な特徴がある。その一つが等至性 (Equifinality) である。開放システムは等至性をもつ。つまり、異なる径路をたどりながら類似 (similar) の結果にたどりつくのである。生から始まる人間にとっては死がその等至な結果である (もちろん、胎児に焦点をあてれば、受精と出産 (誕生) を設定することも可能である)。なお、ベルタランフィ (1968/1973) がとりあげた開放システムのもう一つの特徴は、エントロピー増大を避けながら秩序的状態に向かうことであるがここではこれ以上触れない。

等至性という概念はもともとドイツの生物学者ドリーシュ (Driesch) が、ウニの胚の研究において提唱した。ドリーシュは、ウニの胚の初期発生の研究を行い、完全な卵でも、卵を分割した場合でも、あるいは、二つの卵を一つにつけた場合でも、それぞれ同じ結果、即ちウニの正常な個体ができるという現象を見いだした (溝口・松永, 2005 参照)。そして、ベルタランフィはこうした知見をもとに、一般システム理論を構築し、人間は環境から独立した個体としてではなく開放系 (開放システム) としてみなされるべきだと主張した。ベルタランフィによれば、開放システムの特徴で重要なのは等至性である。この立場を開放システムとしての人間の発達事象に拡張した場合、人間には等至性があるという言明となる。等至性を実現するポイント (Equifinality Point=EFP) を等至点と呼ぶ。等

至点は人生上での行為や経験のうち何らかの意味で当人にとって重要であり、かつ、研究上の焦点化がなされる点であることを含意している。

3 複線径路 (Trajectory)

複線径路は、発達径路の多重性 (Multi-linearity) を示すためにヴァルシナー (Valsiner, 2000) が導入した概念である。なお、この複線径路は、等至点が想定されることにより定まることに注意を要する。ここで言う複線径路とは一つの等至点までの径路の多様さを表す概念である。ただし、研究上の焦点となる事象が一つに絞られるべきだということの意味するわけではない。人間の発達のゴールは一つに絞る必要はないし、むしろ絞られるべきではない。等至点自体がある種の選択可能性をもつべきなのであり、この点については後に「両極化した等至点」の項 (3-6) で述べる。

生物としての人間の発達現象には一定の方向がある。また社会的存在としての人間の発達現象にも同様に一定の方向づけがなされる。これまでの心理学における発達段階による説明は、ほとんどの人々が同じような段階を踏んで次の段階に至ることを前提にした考え方である⁵⁾。もちろんこうした理論の妥当性が認められる現象は多いのだが、それが全てではない。我々は同じ目的に対する径路の多様性を認めその多様性を記述する方法を模索すべきである。遠藤 (2005) もまた、愛着研究に進化心理学的観点がつりいられることによって「代替的な複数の発達経路の存在」が議論されていることを紹介しながら発達の多様性を考えることの重要性を示唆している。

我々の考えている複線径路の特徴を明確にするために、同じく径路の多様性を記述するイギリスの発生学者ワディントン (Waddington) のエピジェネティック (非遺伝的、もしくは後成的)・ランドスケープモデル (Waddington, 1956) と比較してみよう。彼のモデルは砂山 (地表) をボールが転がっていくような図であり、その行く末がいくつかに分岐している。このモデルでボールは遺伝子 (あるいは遺伝型をもった個人) を表し、地表とそのうねりは環境側の要因を表している。ここでボールと地表の相互作用はほとんど表現されていないことには注意を要する。また、この図はその形が末広がり

であり、(人間発達にあてはめるなら)個人の違いがどこまでも拡大していくことを暗示するモデルになっている。これに対して、TEM はエビジェネティック・ランドスケープモデルとは異なり、個人的・文化的制約の中での人間発達(時間に伴う変化)の等至性を重視する。

人間の発達はある意味では多様性をもっているが、生物体としてもっている制約や広義の文化的制約⁶⁾を多々受けるために、ある一定程度の範囲内に収まりがちである。TEM の表現はあくまで等至点とそこに至る複線径路を描くことを目標としている。

また、TEM は心理学者マーフィの水路づけの理論(Murphy, 1947)との類似性も高いと考えられるが、水路づけはどちらかという心理的過程もしくは行動の固着化を説明する概念である。文化的水路づけのような使われ方をする場合も外界の力や制約の強さによる価値観や人格の固定性を含意することが多い。これに対して、TEM では複線径路の可視化や分岐点における個人の選択の重要性を強調するという違いがある。

4 分岐点 (Bifurcation Point=BFP)

概念としての分岐点は、ある経験において、実現可能な複数の径路が用意されている状態である。複線径路を可能にする結節点(ノード)のことを分岐点と呼ぶ。分岐点は後に径路が分岐することが前提になっているのではなく、むしろ、結果として後に複数の径路選択が発生することを強調するものであり、その場合の結節点のことである。分岐点は転機という概念に近いのであるが、転機のように重大な意味をもたせない。転機のような表現は、ある一つの事象に断絶的あるいは非可逆的な意味をもたせてしまう傾向がある。日常語としては、転機があったという言い方は一般的であり、そのように思える出来事もあるかもしれないが、TEM では転機ではなく分岐点という位置づけをする。これは一方では、ある経験の絶対性を失わせることになるが、回復可能性を重視する見方でもある。

5 非可逆的時間 (Irreversible Time)

発達を扱う心理学は時間を扱うところが他の多くの

心理学と異なり、生物学と接近するところでもある。そしてこの複線径路・等至性モデルも人間を時間と共に扱うことを重視する。

哲学者ベルグソンは時間を空間のような実在として捉えてはならないと喝破した。このことを踏まえれば、時間軸上を人間が歩いていくようなモデルではなく、人間が時間と共にあるようなモデルを作る必要があるだろう。TEM の図で水平方向の次元は時間を表している。ただし、何らかの基準線を表現しているわけではない。図には左から右へと不可逆の時間を示す矢印のみがあるだけで、具体的な時間の長さを書き入れない。時間を単位化したりせず、ただ質的に持続しているということのみが重要だということを示している。なお、図の垂直方向の次元では人間から見た場合の選択肢や径路の多様性を表している。ある選択肢を選んだ場合に、同様の状態にとどまるにせよ他の状態に移行するにせよ、質としての時間が経過しているということ(つまり持続)を示しているのである。

そもそも、時間の扱い方については2種類あるとヴァルシナー(2000)は指摘する。まず、物理的時間のような意味での時間である。時計で計時できる時間(クロック・タイム)であり、2秒の倍は4秒、1年の倍は2年、というように計算できると考える。時間が人間とは独立に存在するように扱い、時間を縦横高さに次ぐ4次元目として感じるような扱い方である。そしてもう一つが、生体のライフ(生活・生命)と本質的に関連する時間である。哲学者ベルグソンはそれを純粋持続と呼んだ(Bergson, 1889/2001などを参照)。金森(2003)によれば「それ(純粋持続のこと=引用者注)は空間とは違い、単位ももたず、互いに並列可能でもなく、互いに外在的でもない。……略……数直線とは違い、それは原理的に後先を指定することが難しく、順序構造をもたない。また可逆性ももたない。それは量的で数的な多様性ではなく、質的な多様性」なのである。持続とは無限の過去から無限の未来へのムーヴである(金森, 2003)。

なお、TEM では水平方向に矢印(→)をひくことによってこの非可逆的時間(irreversible time)を表している。この際、矢印は方向性を示しているのではなく、視覚上の工夫として持続を表しているだけであることに留意されたい。

このような時間の扱いや表し方は、我々が日常で経験する時間から長さを捨象して、順序性のみを保持したとして理解されるかもしれないが、必ずしもそうではない。人間には、ある時間にはある特定の場所である行為しかできないという現象学的性質がある。ある選択をした後に、それを取り消して他の選択肢をとったとしても、時間は戻らず、最初の時点から持続しているのである。TEM による時間の表し方は時間を空間的に表しているのではなく、選択肢を空間的に示す際に非可逆的時間を描いておくことで、ベルグソンの意図する時間の持続性を表現しようとする。

6 両極化した等至点 (Polarized EFP)

両極化した等至点は、安田 (2005) が、TEM を実際の現象の説明に使用する際に生成した概念であるが、むしろ「生成せざるをえなかった」概念であると言ってよい。両極化した等至点という概念は、等至点を一つのものとして考えるのではなく、それと対になるようないわば補集合的な事象も必ず等至点として研究に組み入れるということを要請している。

等至点は研究者が焦点化して抽出するものであるから、研究上、実践上の意義をもっているものが選ばれやすくなる。その際には、何かが無かったとか何かをしない、ということが選ばれることは相対的に少なくなると予想される。だが、等至点として選んだ現象が「何かをする」もしくは「何かをしない」として表現しうるならば、必ずそれらとは背反する事象が存在する。いわば補集合のようなものが存在するのである。ここで補集合という比喻を使うのは、等至点は明確になっけていても (だからこそ抽出できるのだが)、それが無いことが常に明確に意識されるとは限らないからである。たとえば単純な例として、青年を対象に大学入学ならびに大学生活について研究するために、研究者が「大学に入学をする」に焦点をあてるなら、その補集合的事象は比較的簡単に想定できるだろう。しかし、「子どもをもつ」に焦点をあてるような場合、研究者や調査対象者が完全に明確にその全容を意識できるとは限らない。また、その補集合が「子どもをもたない」ということであるとは限らないし、ましてや研究者や調査対象者がそれを意識できるかどうかは

分からないのである。「(結婚したら) 子どもをもつ」ということが、社会一般には当たり前のこととして認識されているからこうしたことがおこるのであり、そこには、文化的社会的な価値意識が介在しているといえる。実際には、「子どもをもたずに夫婦 2 人の生活を満喫する」だとか「子どもをもたずに趣味や仕事に専念する」という選択が存在するはずであり、それが「子どもをもつ」ことの補集合としてあげられるべきである (安田, 2005 参照)。しかし、こうしたことは「子どもをもつ」を等至点として設定した時にはわからない場合の方が多い。

この例に限らず、研究者の焦点は補集合的事象に向きにくいいため、TEM においては等至点を焦点化することが、補集合的事象の焦点化に直結するような工夫を施した。これが「両極化した等至点」という概念の含意である。

両極化した等至点は価値づけというアポリア (難問) と研究者が対峙するためにも重要である。特にジェンダーや比較文化の領域で扱う主題にはこうしたアポリアが多い。研究者の立場や関心を補い、意図せぬ価値づけを未然に防ぐという意味でも両極化した等至点という考えは力を発揮するだろう。

さて、TEM は HSS というサンプリング技法と結びついているから、このような再概念化はサンプリング方法の認識を変えることにもなる。すなわち、研究者が興味をもち関心をもち重要だと思ふ現象をサンプリングすることは、その補集合の状態もサンプリングしたことになるのである。つまり、研究者自身が見ていなかった、あるいは見ようとしなかったことを可視化しうるのであり。このことは、ややもすれば視野が狭くなりがちな研究的視点を補うという意味でも意義をもつ。

なお、具体的に両極化した等至点をどのように図示するのか、ということについては、現時点では図 5 のように上下に分けた上で幅広に表現するのがよいということに落ち着いている。

7 必須通過点 (Obligatory Passage Point=OPP)

必須通過点という概念も実証研究を行うなかで TEM の中に取り入れられた概念であり、ヴァルシナ

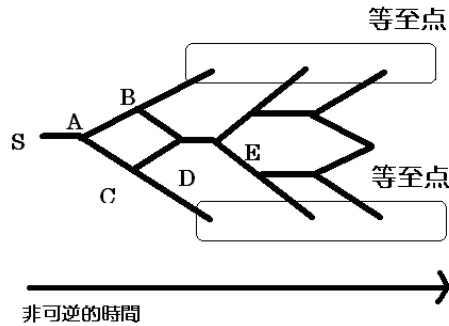


図5 両極化した等至点

一 (2000, 2001) のオリジナルな発想には無かったものである。必須通過点はもともと地理的な概念である。ある地点からある地点に移動するために、ほぼ必然的に通らなければいけない地点があるならばそれは必須通過点となり、地政学上の要衝となる。たとえば大西洋から海路で地中海に至るにはジブラルタル海峡を通らなければならない。この場合、北アフリカとイベリア半島をへだてるジブラルタル海峡こそが必須通過点であり、軍事的政治的な要衝となっている。

この概念を科学社会学的説明に転用したのが科学社会学者ラトゥールであった (Latour, 1987, 1988)。ラトゥール (Latour, 1988) は科学研究の実践においてある問題に関心をもつ人々やセクターが必ず通過しなければいけないポイントを必須通過点として定義した。ラトゥール (1988) は近代細菌学の開祖パスツール (Louis Pasteur) の研究について科学社会学的、科学人類学的研究を行った。そして、パスツールが自分の研究室・実験室で研究上の研鑽を積むことを必須通過点として構成しえたことが、他の学者や衛生事業従事者そして国家などがパスツールの知見を認めやすくなったのだと考えたのである。

地理的概念から科学社会学的概念に転用されたこの必須通過点という概念を、TEM でもさらに転用することになる。ただしここでの「必須」という意味は「全員が必ず」というような強い意味ではなく、「多くの人が」というような若干広い意味で考えている。

現在のところ、必須通過点として以下のようないくつかの種類が認められている。

制度的必須通過点は、制度的に存在し、典型的には法律で定められているようなものである。義務教育課程への入学がその代表例である。慣習的必須通過点は、法律で定められているわけではないが多くの人が経験するようなことで、七五三 (及びその際の正装) がその例となる。こうした経験は特に子どもの場合には自分の意思のみでは避けがたい。結果的必須通過点は、制度的でも慣習的でもないにもかかわらず、多くの人が経験する天災や戦争などの大きな社会的出来事などである。

複線径路の補償という観点から見た場合、必須通過点という概念は個人の多様性を制約する契機を見つけやすくするという点で重要である。

8 径路及び選択肢の可視化

以上、TEM と HSS に関して、それを使いこなすための基本的考え方や概念を説明してきた。しかしここまでで説明しきれなかったにもかかわらず重要な考え方があつた。それは、TEM という方法自身があつている非経験事象の可視化とでも呼べるようなことである。

歴史的に見れば近代心理学は実証的の学問であるから、存在する事象についての研究が基本となる。また、データの欠落はマイナス評価の源泉となることはあつても、プラスに評価されることはない。しかし、フィールドワーク的な研究においては、結果としてデータの欠落が起こりうる。ある理論的前提からデータ収集を行った場合でも、現象に即した考察を重ねた結果、研

究者自身の枠組みが変化してしまい、結果として最初のデータの取り方では不足が生じるということが現実起きる。こうした欠落は研究者側の落ち度として捉えられることが多く、さらなるデータ収集がなければ研究成果を認められることは少なかった。

しかし過度な経験主義（実証主義ではなく）への傾倒は、現象全体への理解を妨げることもある。質的研究においてインタビューなどを行う場合、質問紙調査で量的研究を行う場合に比べて対象となる協力者の数が少なくなり、研究の弱点として捉えられることが多い。こうしたジレンマを解消するのが、調査では得られなかった事象についての可視化である。具体的には「両極化された等至点」の設定と同じである。ある事象 A についてその存在が確信できた場合には、その補集合的な事象 (A) を必ず意識し設定しそこへの径路をも描くということである。

狭い意味での経験的データがもたらす成果よりも、こうした理論による補強の方が複線径路を描くには重要なのである。ただし、補集合的事象を想定することさえ不可能であるか、論理上の想定は可能でもそこへの径路を描けない場合もある。もし仮に径路の可視化ができないなら、そのこと自体も考察の対象になってよい。つまり、ある事態（経験）に至る複線径路を描けない場合が以下のようにいくつかある。これはそれぞれ、先にあげた三つの必須通過点と対応する。「実際に選択肢がない場合」は、制度等によって行為が強制される場合であり、「制度的必須通過点」があることを意味する。「実際に選択肢があるのに見えない場合」は「慣習的必須通過点」として概念化できる。現在の日本における女性の化粧行動はこれに近い。「実際には選択肢が見えるのにほとんど誰も選ばない場合」はたとえば戦争のような事態で、平和という補集合状態も理解できるし、その国が嫌なら国外脱出をするなどの選択肢の存在もありえるが、現実にはそこにとどまらざるを得ない場合である。これが「結果的必須通過点」でありそこに働く社会文化的なパワーポリティクス（力のせめぎあい）を検討する必要が出てくる。地震などの天災もこれにあたる。

このように考えれば、径路や選択肢の可視化は、制約の可視化にもつながり、TEM の要諦の一つだと言える。

4 サンプリング法としてのHSS

人間は開放システムであり、物のように外界から孤立しては存在しないこと、及び、開放システムには等至性が認められること、この二つの特徴を考えるためには等至性を考慮した対象抽出法（サンプリング法）が必要となる。これがサンプリング法としての HSS につながる。

研究対象の抽出方法を意味するサンプリングは、全ての領域の全ての研究にとって必然的なプロセスの一つである。それがどのような学問分野であろうと、対象を抽出することは必須である。対象抽出の方法は研究結果に直接的な影響を及ぼす場合があり、常に研究目的との関係で決定される必要がある。心理学分野の知覚、認知系の領域では、人間を単位としたサンプリング法を用いる場合であれば、サンプリング法が研究結果に直接影響すると仮定されることは少なく、任意的な対象抽出法が重視されている。また、発達心理学など、年齢や成長の要因で比較することを目的とする場合にも、任意のフィールドで任意に対象抽出を行うことが多い。

一方、社会学やそれに近いとされる社会心理学ではランダムサンプリングが重視されることも多い。研究結果の普遍性を担保するために、ランダムサンプリングが求められることは少なくない。データ処理における数値計算の結果はランダムサンプリングを前提として検定などの処置に付されることが多い。また、ランダムサンプリングを用いる場合にはサンプルの数が一定数以上であることが求められる。以上の事情を逆から説明すれば、社会心理学など心理学の一部の分野では、「ある一定の数の対象をランダムサンプリングで収集し検定にかけることが結果の普遍性を保証する」というような言説が好んで用いられるかあるいは暗黙の前提となっている。

しかし、対象抽出法としてランダムサンプリングに積極的意義がない研究もありえる。ランダムサンプリングは、結果に特定の影響を与える要因を人為的に排除できない場合に、その効果を相対的に低減するための方法にすぎないと考えることも可能である。結果の

バイアスをなくすための消極的意味があるにすぎないのである⁷⁾。実際、母集団を人類全体にすることは誰も考えていないのではないか。かつて高野(2000)が指摘したように、人間全体に普遍化するのであれば、現時点だけの人間を選んだのでは不十分である⁸⁾。

そもそも開放システムとしての人間はランダムサンプリングなどできない(この点については Valsiner and Sato, in press で詳述しているので参照されたい)。人間を袋に入ったサイコロのように考えることはできないのである。

研究における対象抽出の方法はランダムサンプリング以外にも数多く存在する。たとえばパットン(Patton, 2002)はサンプリング方略について、無作為確率サンプリングと目的サンプリングに二分した上で合計18種類のサンプリング方略を紹介している。目的サンプリングとは、研究目的に合致する形で対象抽出を行う方法である。我々のサンプリング方法も等至点の抽出という意味で目的サンプリングの一種たることを標榜する。その際には、理論的もしくは実践的興味から等至点を抽出した、というだけではなく、その等至点が歴史的に構造化されているという理論的な理解が必要である。ランダムサンプリングが、人間の外的要因の影響を消去するための消極的方法であるのに対して、HSSは以下のような特徴をもつ。すなわち、文化などの外界と人間が不可分の存在であることを前提とし、人間を外的要因と不断に相互作用する開放システムとしてみなした上で、等至点となる事象を研究対象として抽出している、ということである。

5 具体的な研究方略としてのTEMとHSS

この節では具体的な研究に即して、いくつかの重要な概念や手法について論じる。両極化した等至点と必須通過点という二つの概念がどのように生成されどのように研究で使われるべきなのかということが最初の論点である。また、TEMを類型化やKJ法の手法と併用することの実際とその意義が二つ目の論点である。最後に、径路や選択肢の可視化についても実際の研究に即して考えてみたい。

1 両極化した等至点(Polarized EFP)を考える意味

安田(2005)の問題意識は、不妊女性の経験を生殖補助医療との関係で検討することであった。ただし、協力者を募る際に方法的な制約が多々生じ、結果的に不妊治療をやめた後に養子縁組を考えた人々に協力を募ることとなった。当初のリサーチクエストは「いかにして子どもを諦めたか」であり、そこから協力者の経験を捉えようとしていた。ところが、分析を進めるにつれ、また、繰り返し何度も語りデータを読み返すことによって、協力者は「子どもを諦める」というよりもむしろ、子どもをもつことにのみ固執しない「夫婦2人の生活」や「仕事や趣味などを含めた生活」などに視野を広げながら、「治療をやめる」という行為を選択していたということが、(語りから)浮き彫りになっていった。実際、協力者は「子どもを諦める」とは語っていなかったのである。こうした分析過程における発見は、安田が研究当初から漠然と考えていた「不妊経験は不妊治療終了後も含めて捉える必要がある」という問題意識と合致したという点においても、貴重だった。そして安田は、「不妊治療をやめた」経験に焦点をあて、それを等至点としてサンプリングすることにしたのである。なお、ここで「サンプリング」——「分析過程におけるサンプリング」と言うべきかもしれない——としているのは、こうして抽出した等至点が、その後の類型化や経験記述など研究全体に強い影響を及ぼしており、そのことがこの論文の特徴であるといえるからである。

安田の眼目はそもそも不妊経験の多様性を記述することにあつたのだが、「不妊治療をやめる」ということを視野にいれたために、不妊経験自体の多様性をより豊かに記述することができた。その結果、安田の取り組みはHSSとTEMを適用した最初の(査読付)実証論文となった(安田, 2005)。

ところで、この研究において問題になったのは等至点の価値づけの問題であった。TEMにおける等至点サンプリングの対象は、学問的もしくは実践的意義があるとはいえ、一般的な意味での価値づけとは独立であるべきだし、むしろ価値づけは生じないように注意

を払うべきだろう。ところが、等至点への多様な径路を描く場合には、人為的に設定された等至点が、研究者側の意図とは離れて「目指すべきもの」として立ち上がってしまう場合も想定できる。だからこそ、とりあげる現象を価値づけないように留意すべきである。特に、生殖に関するようなことについては、何かを望ましいものとして読み取れるように概念化することは大きな問題をはらむことになる。

そこで、研究技法として等至点の補集合的事象を考えることが有効だという発想が生まれた。具体的には、「不妊治療をやめる」ことの補集合として、「不妊治療を続ける」ということへ焦点化することである。いずれについても、子どもを望む人々の不妊治療への関わり方のありようなのであり、研究者の焦点のあて方によってどちらかが排除されてはならないのである。

2 必須通過点サンプリングの提唱と挫折

必須通過点という概念は、個人の径路の多様性を収束させる力が働くようなものであった。そこで、個人に働くパワーポリティクス（様々な力のせめぎあい）をより見やすくするために必須通過点をサンプリングするという手法が考え出された。木戸・サトウ（2004）は女性の化粧行動について、従来の心理学的研究では女性が化粧をすることが前提に組み込まれていたことを批判的に考え直し、なぜ化粧行動が当たり前の行為として女性に受け入れられていくのかを検討しようと試みた。そこでまず、文献調査や予備的な調査を行ったところ、日常的に化粧をするようになるまでに、多くの人が経験する事象があった。それは「受け身的化粧」とでも言うべきものである。20歳ぐらいの日本人女性の多くは化粧をしているが、なかには化粧をしない人もいる。しかし、その化粧をしていない人であっても、子どもの頃に「化粧された経験」があったのである。たとえば七五三のような伝統行事の際に、女性は自分の意図や意思とは無関係に、親や周囲の人たちから化粧をされた経験をもっている。このような経験のことを必須通過点として概念化することができるなら、多様な複線径路を描きながらも、ある種の収束点を描くことができる。これが分岐点概念と異なるのは、第一に多くの人が好むと好まざるとにか

かわらず経験するということであり、従って、第二にそこには何らかの力が働いていることが暗示されるということである。

そこで、木戸・サトウ（2004）は必須通過点をサンプリングするため、「受け身的化粧行動」及び「自発的化粧行動」という二つの点に焦点をあてることになった。この研究における等至点は「日常的に化粧をするようになる」ということであり、両極化した等至点を考えるなら、「日常的には化粧をしない」ということも含意されている。

ただしこの必須通過点サンプリングは思ったような成果をあげられなかった。その理由として、研究者の側で既に措定しえた必須通過点に焦点をあけると、仮説検証的になってしまうことがあげられる。また、そこに働くパワーポリティクスも既にある程度まで理論的に分析されてしまっている。つまり、理論的にも実際的にも分かっていることの確認となりがちなのである。そして必須通過点の前後は、その定義からして径路の多様性を描くことも難しくなったのである。必須通過点は結果として立ち現れたものを考察することにその真骨頂があり、必須通過点サンプリングをHSSの技法として用いるのは現状では慎重になるべきである。

3 類型論的理解とTEMの融合

安田（2005）の研究では、分岐点や等至点に関する諸個人の経験を、不妊経験の類型化に適用した。つまり、TEMに関する概念は類型化の補助手段としても活用できるということである。大橋（2005）は個別の事例研究から普遍的な理解を構築する際に類型論を中間項として媒介させることが有効ではないかと論じているが、安田（2005）は「不妊治療」や「養子縁組」といった社会システムへの関わり方を分岐点や等至点としてサンプリングし、それらを不妊経験に織り込むことによって、経験の多様な径路を類型化する試みを行ったのである。

ここで、その類型化の過程について検討していく。この研究では最初に、等至点、分岐点、必須通過点を設定した。次に、このようにしてサンプリングした「不妊治療をやめる」経験（等至点）、「養子縁組を意

識する」経験（必須通過点）、「養子縁組をやめる」経験（分岐点）に焦点化しながら、「不妊治療」や「養子縁組」への関わり方を時間の流れのなかで捉え、それらを個別の多様な不妊経験の径路に織り込む作業を行った。具体的には、まず、「養子縁組を意識する」経験（必須通過点）が「不妊治療をやめる」経験（等至点）よりも時間的に前か後かという観点から、個々の不妊経験を分類した。つまり、「不妊治療」と「養子縁組」への関わり方に着目し、等至点などとしてサンプリングし、それを不妊経験に織り込んだ分析過程を詳細に捉えたうえでの類型化である。こうした類型化によって構築した4類型は、養子縁組選択型（I型）、子どもをもたない生活選択型（II型）、養子縁組浮上・選択型（III型）、養子縁組浮上・選択/子どもをもたない生活選択型（IV型）とされている。

安田（2005）は、個別の不妊経験に関する径路の多様性——つまり時間と共にある個人のプロセスとしての多様性——の記述に焦点をあてることによって、TEMという記述モデルの有効性を浮き彫りにしたことができる。つまりこの研究では、以上のように四つの型に類型化した後に、等至点、分岐点、必須通過点によって個別の経験を収束させたり分岐させたりするTEMの形に開き、不妊経験の多様性を表現したのである（図6）。「不妊治療」と「養子縁組」という一見相容れないこれらの社会システムを連続的に捉え、類型化に織り込むことによって、それらが共に、不妊に悩む人に対する支援のひとつになりうるということをも示唆することができた。

4 KJ法的なデータ処理とTEMの融合

高田（2004）の研究はデータ抽出法としてのHSSを初めて意識した研究である。高田（2004）の興味は青年期にある女性の人工妊娠中絶（以下中絶と記することもある）経験にあったが、こうした経験を扱うインタビュー調査を行うのは、一般的な意味で難しさを想起させる。そこで、理論的枠組みとしてHSSとTEMを用いることにした。

この研究において等至点は「妊娠中絶（をする）」であり、そこに至る複線径路を描くのが研究の目的となる。テーマの特殊性からして協力者を選ぶことが難

しいため、対象をランダムサンプリングなどで選ぶことは不可能であり、中絶経験を等至点としてサンプリングするという手法は妥当であろう。さらに言えば、中絶のような事象もある時間のある場所でしか行われないという意味で制約をもっており、歴史的に構造化された経験である。2004年現在、妊娠中絶手術が非合法とされている国や地域があることを考えるだけで、この経験が単なる個人的経験ではなく、歴史的に構造化されたものであり、それ故にHSSという考え方が有効であることが分かる。

高田（2004）は、まず3名の協力者を探し、承諾を得て半構造化インタビューを行った。インタビューは録音され逐語録が作成された。次に、得られた語りデータから、一つの意味を含む文章のまとまりを一単位として、カードに書き出した。長い話でも一つの内容としてまとめられるなら1枚のカードに、短くても複数のことに言及している場合は複数枚のカードにする。この研究では3名の語りデータが249枚のデータ（カード）になった。

次に、得られたカードを用いてKJ法に準拠したまとめを行った。KJ法は現場取材と創造的総合を旨とする野外科学の方法論であり（川喜田・松沢・やまだ、2003）、データのまとめあげ（グループ化）と図式化によって現象を理解しようとする方法であると捉えることもできる。高田の研究では最終的に、4段階のまとめを経て、5個の大グループ（とその他2グループ）にまとめ上げることができ、それを図式化した。

次に、中絶経験の多様性を描くために、KJ法で得られた第一段階目のまとめ（グループ）を用いて（31個にまとまっていた）、中絶経験の複線径路・等至性モデル（TEM）を作成した。中絶手術を行うという点を等至点（EFP）として、その前後に、時間の流れに沿って他の小グループを通過点として配置した。その際、手続き的・論理的にほとんどの人が経験するであろうことが明らかになった点「妊娠に気づく」「産婦人科で妊娠の診断を受ける」「手術の承諾書にサインをする」「語っている現在」の4点を必須通過点（OPP）として同定した。

さらに、インタビューでは語られていないもの、得られた語りから想定できた点についてもありうる径路として記述し、実際に通過した人がいないことを描

くために、その点へ向かう矢印を破線で記述した。例えば、病院に行く前に、「妊娠検査薬で検査をした」という語りから、妊娠検査薬で検査をせずに病院へ行くこともできると想定し「検査薬で調べない」という径路が設定可能であれば、それを描き込むということである（もちろん、中絶をしないで産むという選択をしたということも想定でき、それがなぜ実現しなかったのかということについて考えることもできる）。このように、想定された径路は実際に語られた径路と対になって示されている。

以上のプロセスを簡単にまとめるなら、インタビューの語りデータを用いて二つの異なる記述・理解を両立させようとしていることになる。データのグループ化という KJ 法にとっての本質的作業を完成まで行わず、いわば途中で中断したような形でデータを TEM に用いることは、KJ 法のオーソドックスな使用法から見れば不適切かもしれない。しかし、諸個人の経験とその径路の多様性をつかむため、そして、時間経緯が重要であるような個人の行為を理解するには、TEM のような方法の方が有効であろう。何より研究方法は対象理解のためにあるのだから多様なあり方が工夫されてもよいとも考えられよう。KJ 法のような手法と TEM の併用は現象を相補的に理解する一つの方法であろう。なお、KJ 法に依拠することによって、3 名の中絶経験の意味をそのデータ全体を用いて内面的に理解することができることは TEM にはない利点であり、TEM だけの理解を重視しているわけではないことを付け加えておきたい。

5 TEM実践のための手順化

こうした考え方や研究法に関心をもつ人のために、最後に簡単にその手順を示しておく（表 2）。この手順化は現時点での手順であり、必ずしもこれに縛られる必要はない。

6 理論的な意義と展望

1 モデルとしてのTEMの意義

TEM の M は Model (モデル) の略である。ではモデルとは何か、モデルであることは何を意味するのか。こうした議論については優れた論考が複数あるが（やまだ, 1986/1997; 佐伯, 2000; 西條, 2003）、ここでは佐伯（2000）の議論を紹介する。佐伯（2000）は科学的探究におけるモデルの意味を検討し、「データモデル」と「構造モデル」に分けられるのではないかと提起した。前者のデータモデルは、現実世界を何らかのモデルで表した上でそのモデルから得られた予測と、実験などのデータとの適合度を検討するものであり、仮説検証のためのモデルである。それに対して後者の構造モデルは、現実世界を「多様なデータを生成するメカニズム（構造）」としてとらえ、その構造をモデル化しようとする。この佐伯（2000）の用法に従えば TEM は構造モデルという意味でのモデルを提供する。

しかし、こうした学問的議論から離れるなら、モデルにはファッションモデルやスーパーモデルというような用法もあることに気づく。TEM は理想像や目標、参照すべき対象という意味でのモデルとしても機能するのである。

人間や組織などの開放システムは、その活動や生活において、ある時点である一つのことしかできない。また、実際には存在する選択肢が見えないことも多い。だが TEM を使えば、その等至点に至る複数の人の複数の道筋を丁寧に描きやすい。また、そうやって描かれた複数の径路は、他の人にとって選択肢の可能性として参照できるのである。データに基づいて作成した TEM というモデルが、他の人の人生のモデル（やまだ, 1986/1997）として機能するのである。

やまだ（2002）は、現場（フィールド）心理学におけるモデル構成は「特定の現場に根ざすローカリティをもちながら、他者と共有できるような一般化」を行うものであるとする。逆から考えれば、ローカリティをもちながらの一般化という矛盾した要請に応えるに

表2 TEM実践のための簡単な手順化

- 1 関心のある事象や経験を等至点としてサンプリングする。
- 2 データを収集する（今回紹介した研究はいずれも面接調査であったが、それに縛られる必要はない）。
- 3 面接で得られた語りを最小単位に分け、それを分析単位とする。
- 4 分岐点や必須通過点を設定する。その際は語りで得られた情報だけでなく、社会的、制度的、文化的知識を活用する。
- 5 両極化された等至点を設定する。自分が関心をもつ事象の補集合的な事象を書き込み、両極化した2つの等至点に至る道筋を描けるような準備をする。
- 6 TEMとして複線径路を考慮しながらチャート化する。その際、実際のデータによらない場合には点線で描くなどの工夫が必要である。
- 7 類型化やKJ法を行う場合はその結果も参照して考察を行う。

*類型化やKJ法（の図解化）との併用も可能である。むしろ併用による複眼的理解がより望ましいように思える。

はモデル化という作業が有効だということである。TEMも基本的にそうした考えに依拠している。ただし、TEMはその特徴として（フィールドワークやエスノグラフィのように特定の場所における文化の記述を目指す場合よりも）、人間がある程度の時間の幅をもって生活上経験する問題に焦点を当てたときに使用しやすい。

2 質的研究において見えない径路を描く意義

さて、本論文3-8節においても述べたように、（語りや観察データには存在しないものの）あり得る道筋を描くことはTEMの大きな特徴の一つである。そして、これは質的研究の欠点を補う一つの方法だと期待できる。つまり質的研究では限定されたデータの意を最大限に汲もうとする手法は多かったが、それでも限界があったからである。また、研究開始以前から測定ツールを用意して研究を行う量的研究ではそもそもこうしたスタンスはとりえない。TEMはこれらの研究の限界を超える一つのヒントを与えてくれる。

前述のようにモデルは、それが模倣されるものであることも想定されている。したがって、ある岐路において可能な選択肢を呈示するということが、教育実践や心理臨床やソーシャルワークなどの援助実践において等至性を認識することの効用だといえよう。ひとつ例をあげるならば、四年制大学を卒業しそびれて中途

退学になったとしても、学士資格を取得する道が開かれている、ということがある。ただし、こうした社会システムの存在が社会の中に広く浸透しているかといえば、そうとは言い難い現実があるのであり、よって、見えにくい社会システムの存在を可視化することの重要性をここに見てとることができる。人は、経験を積み上げながら自己の人生を歩んでいく過程において、予期せぬ出来事であつまずいたり選択を誤ったりすることもある。幾度も選択し直すことができるということを変更して明確にし、選択可能な社会資源の存在を可視化する可能性を秘めた等至性及び複線径路の概念は、心理カウンセリングやキャリアカウンセリングなどの援助実践においても役立つであろう。

ただし、当事者の精神状況や直面している困難の度合いによっては、将来を展望するような示唆的情報が、そこに到達すべきだという強迫的な負担として受け取られたり、あるいは、そこに未だ行き着くことができていないという不安全感や焦燥感を煽ってしまう可能性があることに、援助者は注意を向ける必要があるだろう。さらには、単に代替としての選択肢を呈示することが、自分の進む道をきちんと理解されていない（今の選択を諦めろというようなこと）という思いを当事者に喚起させるだけの結果にならないとも限らない。よって、等至性概念の有効性を認識しつつも、援助実践をするに際しては、当事者それぞれの状態に応じた関わりや選択肢の呈示が必要であることは言うまでも

ない。

なお、唯一絶対のモデルを他者に対して示すことにはそれがどのようなものであれ慎重になる必要があると言える。だが、TEM は等至点を描く際に必ず「両極化した等至点」が言及されるため、こうした危惧への最低限の配慮はなされている⁹⁾。

7 結語

複線径路・等至性モデルは人間や組織の可能性と多様性を支援する米国生まれ日本育ちの心理学的方法論的枠組みである。質的研究や文化心理学にも適用できる可能性をもっている。

心理学を含む広い意味での人間科学は、その扱う対象が拡大し、定量的、介入的方法が難しい現象を対象とする研究も増えてきた。こうした研究には定性的データの収集とその分析が重要となる。複線径路・等至性モデルはそのための一つの提案である。

この方法の特徴は、データに依拠しつつもデータに拘束されない、という点である。得られたデータから最大限の情報をひきだし、理論を作ることも重要だが、方法論的制約から得ることのできなかつたデータについても思いを巡らすことで、(両極化した)等至点とそこに至る複線径路の多様性を描くことが可能である。そうすることで社会文化的要因の影響の大きさや小ささを描くこともできる。

TEM や HSS はそれ自体で何らかの現象を説明するものではない。最後にこれらを支える大きな理論的背景を説明しておくことはこれらを適用しようとする人たちにとって有用であろう。

サンプリング法としての HSS は、人間を含む開放システムの発達、歴史的に構造化された外界との関係のなかで考えられるべきだということを基本としている。また、TEM は単に個人の人生や経験を記述するだけでなく、人間や組織などのシステムが多様性を実現する手助けとなることを目指す。ある目標に至る道筋が一つしかなければ、我々の自由は限りなく制限され、何かに従わざるを得なくなるからである。

そもそも、なぜ径路が複線であることが大事なのか。

選択肢が一つしかない(あるいは見えない)状況は人を従属的にさせるからである。また、一つの失敗を大げさに扱うことにもつながる。しかし、径路が複線性的であるなら、ある分岐点で一つの選択をした結果がその時点で成功しても失敗しても、その後また同じ点(等至点)に至ることもありえると考えられる。複線径路という考え方は回復過程を暗示するモデルでもあり、成功体験を増長させないモデルでもある。

なお、このモデルは対象が開放システムであればマクロ、メゾ、ミクロという三つのレベルにおいて発生(genetic)過程ならびにその継続過程を扱うことが可能である(表3)。本論文では主に第二のレベルであるメゾレベルを扱ったが、短期間で行う意思決定のあり方や国や組織などの長い期間にわたる変化のあり方なども扱うことができるのである。

TEM や HSS は特定の現象に特化した方法論ではなく、したがって何を扱うのか曖昧な側面がある。このような方法論のあり方を説明するときには、フレームゲームという概念を使うと理解しやすい。フレームゲームのフレームの意味について、クロスワードパズルの例で考えてみたい(Greenblat, 1988/1994)。クロスワードパズルとは、ヒントを手がかりにして小問を解き、その解答の文字を空欄に埋めていくことで全体の課題を解いていくものである。このクロスワードパズルをその内容や目的からみれば、千差万別でありいろいろな形式がある。しかし、我々はクロスワードパズルを他のパズルと弁別して認識することが可能であり、クロスワードパズルをそれとして成り立たせるこうした枠組みを認識することができ、それこそがフレームだと考えられるのである。TEM はフレームゲームで言うところのフレームである。このようなフレームゲームの要素をもつものは TEM だけではない。グレイザーとストラウス(1967/1996)が開発して広く使用されているグラウンデッド・セオリーや、やまだ(2002)による「モデル構成のための現場心理学の方法論」などもフレームゲーム的な方法論という意味では同じ機能をもっているだろう。常に新しい研究を生み出していく駆動力になりえる方法論である。

もちろん、これらの方法論と TEM がどう違うのか、ということも今後は問題になる。だが、そうした論評は本稿のような方法論の提唱論文の範囲を超えており、

表3 TEMで記述できる3つのレベル

ミクロ・ジェネティック	日常生活における意思決定
メゾ・ジェネティック	個々人のライフコースの発達過程（個体発生）
マクロ・ジェネティック	社会や社会集団，組織の歴史

ここでは TEM の特徴を再度述べるにとどめておく。サンプリングを意識した時には等至点を重視すること、記述を意識したときには可視化されてない径路を含めて複線径路を描くこと、常に時間軸を意識して時間的経緯に注意を払うこと、という諸点が特に重要な TEM の特徴である。

なお、TEM 及び HSS に対しては、その依拠するシステム論が古典的なシステム論であり近年のシステム論自体の展開をふまえるべきだという批判もあり、この点については今後検討していきたい。

TEM 及び HSS は人間を含む開放システムのあり方に関心のある人、質的記述に関心をもつ人ならば誰でも使用できる。そして、まだまだ若い方法論であるだけに、多くの研究に適用されることによって新しい技術や概念の発展を促す余地が十分にあるといえる。

注

- 1) サンプリング方法論とデータ記述論の間には、実際のデータの取り方に関するデータ収集方法論が必要だが、インタビュー法などこれまでの質的研究の蓄積が使用できるため、新たな開発は必要なく、ここでの中心的課題とはならない。また、我々は trajectory を「径」路と訳出しているが、一般には同様の意味を「経」路で表す場合も多い。引用の場合は著者の表記に従ったことをここで付記しておく。
- 2) これらはそれぞれ部分的に重なりあっているが、本論文において我々は社会文化的アプローチの立場に寄り添いつつ論を進める。社会文化的アプローチという呼称は、文化歴史学派、社会歴史的アプローチ、活動理論、状況論などの総称である。それはヴィゴツキー学派の流れをくむものであり、特に文化的媒介という概念によって学習研究における個人と社会の二項対立を超克したといえる（石黒，2004）。
- 3) こうした行為はそれ自体として、社会的な文脈の中

に埋め込まれ、歴史的に構成されてきたものであるから、社会的行為という名前と呼ぶことがふさわしいが、ここでは一般的な「行為」という名称で呼ぶことにする。

- 4) ただしベルタランフィ（1968/1973）は、その著書第三章で「いくつかのシステム概念の初等数学的考察」は行っている。
- 5) このような考え方を間接的にせよ支えていたのが量的研究である。すでに述べたように、発達のプロセスを記述するデータがあるなら、それは多くの人に共通する部分を取り出していた。実証的な研究をする段になれば、性や年齢・学年などは比較のための「自然の実験計画」の役割を担わされ、その差異を前提として比較という手段によって結果の妥当性を高める役を担っていた。その際には平均値などの縮約値をもちいた抽象的記述やカテゴリ間の比較をしたうえで連続性を読み取ることが多かった。これもすでに述べたように、このような理論や方法論は、必然的に多様性を捨象していたことにつながるのだが、それにもかかわらずこうした手法が好んで用いられたのは量的研究の結果が法則定立を可能にするように感じられたからであろうか。
- 6) 環境と人間の関係に関してリダンダントなコントロール（冗長な統制）という概念もある。ある人物に対して環境側の唯一のエージェントが唯一のコントロールを生じさせているということは稀で、むしろ、様々なエージェントが同じ時間同じ人物に異なる影響を与えている場合の方が多い。そうした様々なエージェントの影響力行使の中から何かを選び取り個人はある一つのことをしたりするのである。このことは冗長性であるとともに、個人の選択技をひろげ他の進路の保障としても働く。これは小嶋が提唱した Ethnopsychological pool of ideas という考えにも近い（Kojima, 1998）。
- 7) このことに加え、ランダムサンプリングは対象を抽出するまでに無作為性が付与されるのであって、実際のデータ収集にあたっての欠落については何ら語っていない。従って得られたデータの無作為性を保証しているわけではないことに注意を要する。調査

対象の欠落自体が何らかの要因の影響を強く受けているとしても、そのことが考慮されることはない。

- 8) ランダムサンプリングは何かの効果を見るためのものではなく、対象のかたよりを低減するための方法である。心理学が範とする自然科学においてランダムサンプリングをするような研究分野は必ずしも多いわけではない。心理学の中でも自然科学に近い分野ではランダムサンプリングを行わないことも多い。したがって、研究の目的にふさわしいデータ抽出法、あるいは、研究目的をそこなわないデータ抽出法が存在する場合にはランダムサンプリングを行うのではなく他の手法をとることはおかしなことではない。
- 9) 心理学の理論が往々にして社会学や哲学から現状追認的かつ制度補完的であると批判されることがある。なぜ心理学の理論が現状追認的だというような批判を浴びるのだろうか。これは簡単に言えば自己統治の方法が社会統治の方法に転化することへの批判だと捉えることができる。たとえば小松 (2005) は、19世紀に科学として隆盛を誇った骨相学を教育実践に結びつけたコムという学者の理論と実践を検討する中で、「社会統治を目指した教育に、骨相学は不断に自然法則という『科学的』根拠を与え、教育するという欲望を常に喚起しつづける」ことを指摘し、「このような骨相学と教育との循環構造は、現代の心理学と教育実践の間にも根強くある」のではないかと疑念を呈している。

ここまで論じてきた我々の理論も教育実践と心理学理論の共犯関係の中に取り入れられる危険があることは確かに認めておくべきであろう。最も極端な形で言えば「一度人生がダメになりかけても、**の為になれるのだから奮起しろ」のような言説が一定の目的のために用いられる可能性は排除できない。しかし、この理論はそうした特定の目的を鼓舞する言説のために存在するのではなく、あくまでも多様な選択肢設置、多様な人生径路の選択を補償するために存在することを強調しておきたい。特に、等至性の概念は崇高で唯一絶対なものとして捉えられてはならない。まず、両極化した等至点 (Polarized EFP) という概念で示しているように、研究者たちが設定する等至点は、それを至高の価値あるものと捉えられてはならず、むしろその補集合的事象を必ず視野にいれて当初の等至点の理論的実践的価値を相対化すべきである。もちろん、設定された等至点以外の「非可視的なポイント」を描きだすこともできる。等至点やそこに至る径路の多様性を補償することこそがこの方法論の目指すところであって、ある等至点を絶対視して、「どのような道をたどろうと必ずそこにに行け！」といった強制するための言説ではな

いのである。

引用文献

- Bergson, H. (2001). 時間と自由 (中村文郎, 訳). 東京: 岩波書店. (Bergson, H. (1889). *Essai sur les donnees immediates de la conscience*. Paris: F. Alcan.)
- Bertalanffy, L. von. (1973). 一般システム理論: その基礎・発展・応用 (長野敬・太田邦昌, 訳). 東京: みすず書房. (Bertalanffy, L. von. (1968). *General system theory*. New York: G. Braziller.)
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- D'Andrade, R. (1995). *The development of cognitive anthropology*. New York: Cambridge University Press.
- 遠藤利彦 (編). (2005). 発達心理学の新しいかたち. 東京: 誠信書房.
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1996). データ対話型理論の発見 (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1967). *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine.)
- Greenblat, C.S. (1994). ゲーミング・シミュレーション作法 (新井潔・兼田敏之, 訳). 東京: 共立出版. (Greenblat, C.S. (1988). *Designing games and simulations*. Newbury Park, Calif.: Sage publications.)
- 石黒広昭 (編). (2004). 社会文化的アプローチの実際——学習活動の理解と変革のエスノグラフィー. 京都: 北大路書房.
- 金森 修. (2003). ベルクソン——人は過去の奴隷なのだろうか. 東京: 日本放送出版協会.
- 川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ. (2003). KJ 法の原点と核心を語る. 質的心理学研究, 2, 6-28.
- 木戸彩恵・サトウタツヤ. (2004). 化粧における性格特性の影響——女子大学生および女子短期大学生の化粧意識とその実際——定性的研究の実際 (104). 第68回日本心理学会発表論文集, 3.
- Kojima, H. (1998). The construction of childrearing theories in early modern Japan. In Lyra, M., & Valsiner, J. (Eds.) *Child development within culturally structured environments. Vol.4. Construction of psychological processes in interpersonal communication*. (pp.13-14). Stanford, Ct.: Ablex Publishing Corporation.
- 小松佳代子. (2005). 骨相学の教育論的展開——心理学の主戦場としての教育. 佐藤達哉 (編), 心理学史の新しいかたち (pp.69-83). 東京: 誠信書房.
- 近藤邦夫. (1994). 教師と子どもの関係づくり: 学校の

- 臨床心理学. 東京：東京大学出版会.
- Latour, B. (1987). *Science in action: how to follow scientists and engineers through society*. Cambridge : Harvard University Press.
- Latour, B. (1988). *The pasteurization of France*. Cambridge: Harvard University Press.
- 箕浦康子. (1997). 文化心理学における意味. 柏木恵子・北山忍・東洋(編), 文化心理学 (pp.44-63). 東京：東京大学出版会.
- 溝口元・松永俊男. (2005). 生物学の歴史, 改訂新版. 東京：放送大学教育振興会.
- Murphy, G. (1947). *Personality*. New York: Harper and Brothers.
- 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ(編). (2004). ワードマップ質的心理学：創造的に活用するコツ (pp.192-198). 東京：新曜社.
- 大橋英寿. (2005). 日本質的心理学会設立記念集会对談における発言. 大橋英寿・やまだようこ. 質的心理学の来し方と行方. 質的心理学研究, 4, 6-15.
- 大久保智生・黒沢香. (2003). 関係論的アプローチによる動機づけ概念の再考. 心理学評論, 46, 12-23.
- Patton, M.Q. (2002). *Qualitative research and evaluation methods* (3rd ed.). Thousand Oakes, CA: Sage Publications.
- 佐伯胖. (2000). プラモデルはどんな「モデル」. 佐伯胖・松原望(編), 実践としての統計学 (pp.7-8). 東京：東京大学出版会.
- 西條剛央. (2003). 「構造構成的質的心理学」の構築. 質的心理学研究, 2, 164-186.
- Sato, T. (2004). Money and Child Project; from the viewpoint of cultural psychology. Paper presented at the International Symposium on Cultural Psychology (Held at Ritsumeikan University Kyoto, Japan).
- Sato, T., Yasuda, Y., & Kido, A. (2004). Historically structured sampling (HSS) model: A contribution from cultural psychology. Paper presented at the 28th International Congress of Psychology, Beijing, China, August, 12.
- 高田沙織. (2004). 経験者の語りからみた人工妊娠中絶——HSS と TEM による多様性の記述. 立命館大学文学部 2004 年度卒業論文 (未刊).
- 高野陽太郎. (2000). 因果関係を推定する——無作為配分と統計的検定. 佐伯胖・松原望(編), 実践としての統計学 (pp.109-146). 東京：東京大学出版会.
- 竹尾和子・片成男・高橋登・サトウタツヤ・山本登志哉・呉宣児・金順子・崔順子. (2004). お金のやりとりから見た子どもの親子関係と友だち関係——大阪調査から. 発達研究, 18, 1-13.
- Valsiner, J. (2000). *Culture and human development*. London: Sage.
- Valsiner, J. (2001). *Comparative study of human cultural development*. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- Valsiner, J., & Sato, T. (in press). Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, J., Kolbl, C., Weidemann, D. & Zielke, B. (Eds.) *Pursuit of Meaning. Theoretical and Methodological Advances Cultural and Cross-Cultural Psychology*. Bielefeld: transcript.
- Waddington, C.H. (1956). *Principles of Embryology*. London: Allen & Unwin.
- 渡邊芳之. (1996). 心理学的測定と構成概念. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 3, 125-132.
- 渡邊芳之. (1997). メタファーとしての「こころ」——心的概念が意味しているもの. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 4, 75-82.
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51. (やまだようこ(編), (1997). 現場心理学の発想 (pp.161-186). 東京：新曜社. に再録)
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・片成男・呉宣児・金順子・崔順子. (2003). お金をめぐる子どもの生活世界に関する比較文化的研究：済州島調査報告. 共愛学園前橋国際大学論集, 3, 13-28.
- 安田裕子. (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程：治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226.

謝 辞

本研究の遂行にあたっては、日本学術振興会人文社会系振興プロジェクト（「ボトムアップ人間関係論の構築」）及び立命館大学（学術研究助成）の援助を受けた。第 69 回日本心理学会にてこの問題について議論した折に有益なご指摘をいただいた箕浦康子氏（お茶の水女子大学教授）、遠藤利彦氏（京都大学助教授）に感謝いたします。また、立命館大学で行われた HSS 研究会での検討に参加し、今回の執筆の際にも貴重なアドバイスをいただいた荒川歩氏（立命館大学人間科学研究研究所研究支援員）に感謝します。

(2005.5.30 受稿, 2005.11.7 受理)